

二〇二四年度・学力考查問題【国語】

(高校第二回)

注意

- 一、試験時間は50分です。
- 二、答えはすべて解答用紙にはつきりと記入しなさい。
- 三、解答用紙のみ試験終了後集めます。
- 四、問題は16ページで□・○・△・◇の四題あります。開始の合図で必ず確認し、そろっていない場合にはすぐに手をあげなさい。
- 五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてありますが、設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。また、特に指示のないかぎり、句読点も一字に数えます。

線あくおのひらがなを漢字に直しなさい。

- 1 たいだあな生活を改める。
- 2 常にけんいきよな姿勢えいでいることは大切だ。
- 3 遊あそんでばかりいて、時間じかんをろうひ⑦してしまった。
- 4 返事こたへをさいそく⑧する。
- 5 生地せいぢをたち⑨、新しい服を作る。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

メディア論では、「人の感覚がテクノロジーによって書き換えられていく」という考え方をすることがよくあります。「技術は中立的なものだ」と語る人がたまにいますが、これは実状に反しています。実際には、新たなテクノロジーは普及するにつれて、行動様式、感じ方や捉え方、ものの見方を具体的に変えていくのです。

技術が感性のあり方を左右していくのだとすれば、¹スマホを手にした私たちはどう変わってしまったのでしょうか。問題点について考えるわけなので、この変化によって失われたものにフォーカスしてみよう。技術について考える中で、私たちは原理的な問い、平たく言えば「そもそも論」に巻き込まれていくと※1タートルは言います。「私たちは本当に重要なものは何か」という疑問に立ち返っていくことになるのだと。スマホの先にある「本当に重要なもの」とは何でしょうか。常時接続の世界で失われたもの。いろいろな論者の見解を私なりに整理して総合するなら、それは二つの観点から説明できます。それは、〈孤立〉と〈孤独〉です。それぞれについて言い換えれば、他者から切り離されて何かに集中している状態と、自分自身と対話している状態のことです。

常時接続の世界の行動について立ち止まって考えればわかることですが、私たちは、反射的なコミュニケーションを積み重ねています。いろいろなものを保留しながら、短いテキストやアクションで表面的な返答を順次していく。

例えば、こんな光景はありふれたものでしょう。対面で誰かと話しているときに、スタンプと短いテキストで4人に「ロフ」を返し、フリマアプリが表示してくるお知らせをスルーして、早送り機能でソシャゲのストーリーを進め、「Twitterでいくつかの記事を熟読せずにリツイートし、Instagramで気に入ったインフルエンサーの薦める服を保存しておく。

ここで失われているのが〈孤立〉です。何か一つのことに取り組み、それに集中するにはあまりに気が散っていて、いろいろなコミュニケーションや感覚刺激の多様性が、一つのことと没頭することを妨げてしまっています。ここで念頭に置かれている「〈孤立〉の喪失」^{※2}は、マルチタスキングによる注意の分散のことであり、これは、メディア技術が可能にした「アテンションエコノミー（注意経済）」の一つの帰結でもあります。

インターネットでは、広告や利用者の囲い込みなどをベースに成り立っているビジネスが多いですが、アテンションエコノミーは、そうした環境で成り立つ経済のあり方のことです。具体的には、情報の内実や質よりも、人の注目²それ自体が価値を持つことを指しています。

アテンションエコノミーにおいては、コンテンツ、広告、製品、サービス、ウェブプラットフォーム、オンラインサロン、YouTubeチャンネル、インフルエンサーなどのいずれも、どれくらいの人³がそれに注目し、クリック数や購入者数、登録者数、売上などがどれくらい具体的に動いているかという、数量的な「動員」（エンゲージメント）こそが問題になります。

あらゆる人間やイベント、商品などがアテンション（＝注意）を奪

うことに最適化していて、それらが私たちの注意を奪い合うだけでなく、私たち自身もSNS^{※3}の発信を通じて、そうした注意を奪い合う競争に参加しています。

こうした消費環境は明らかに注意の分散に貢献していますが、別に企業や技術だけのせいでもありません。私たち自身が、日夜スマホを通じて注意を分散させる試みに喜んで参加していることを進んで認める必要があるでしょう。スマホを触りながらの対面コミュニケーションでは、相手の会話は薄く聞くだけ、小難しい内容は無視する、何か聞かれたら生返事、そんなやりとりが関の山でしょう。こんな環境で、「消化しきれなさ」「モヤモヤ」「難しさ」の類を抱えておくなんてやつ^{※4}られないとしか思えないはず^{※5}です。

残念ながら、注意の分散によっておろそかになるのは、対面のコミュニケーション^{※6}だけではなくありません。マルチタスク的に処理しているあらゆることが、同時並行している分だけおろそかになっています。漫画を読むことも、電話をすることも、音楽を聴くことも、誰かとテキストをやりとりすることも、全部です。

さらに悪いニュースとして、タスクルが危惧する以上のことが起こっています。つまり、スマホを通じて注意を分散することに慣れた私たちは、スマホを使っていないときでさえ、気もそぞろで対面のやりとりをしているらしいのです。

いくつかの研究が示唆するところでは、スマホを触っていない可^{※7}能性があります。具体的には、会話での共感レベルが下がり、話題がスマホに左右される恐れがあり、自他の感情や心理状態への注意が削

がれてしまいかねません。

恐らくこのことの背景には、注意の分散があるのでしょう。一つのこと十分に注意を向けて、それについてあれこれ考える習慣そのものが衰退しているのだとすれば、やはり「孤立」が重要になってきます。いろいろな事柄や相手に注意が分散しているわけですから、対面での会話が作業するようにこなされてしまうのは当然です。反射的なコミュニケーションで自分を取り巻くことは、相手の人格や心理状態を想像しないようにと日夜練習を積み重ねているようなものです。マルチタスク化した生活がもたらす「孤立」の喪失は、なかなか問題があらそうです。

常時接続の世界では、「孤立」だけでなく「孤独」もまた失われつつあるという話でした。

「孤立」は、注意を分散させず、一つのことに集中する力に関係するのに対して、「孤独」は、自分自身と対話する力に関わっています。やはりタークルが、印象深い事例を挙げているので、これを手がかりにしましょう。

先日、仲がよかった友人の追悼式に出席したとき、プログラムが書かれたクリーム色のカードが用意されていた。そこには弔辞を述べる人の名前、音楽を演奏する人の名前や曲名、そして若く美しかったころの友人の写真が載っていた。私のまわりの何人かは、そのプログラムで携帯電話を隠し、式のあいだにテキストを送っていた。

その中の1人、60代後半とおぼしき女性が、式のあと私のそばに来て、当たり前のような口調で「あんな長い時間、電話なしで座っているなんて無理ね」と言った。式の目的は、時間をとってその人に思いをはせることではないのか。この女性は、手にして10年にも満たないテクノロジーのせいだ、それができなくなっているのだ。

これが「孤独」を欠いた状態の一例です。心当たりのある人もいるでしょうか。

実は私自身そうです。祖母の葬式に出て遺体が焼かれるのを待つているとき、スマホを触りたくて仕方がなかったことがあります。そのときの私は、「うまく言えないけど、そうしないほうがいいだろう」と思っ、電源を落とし、鞆の奥にしまいました。

代わりに、外の風景をただ眺めたり、近くにいる親戚と何でもない話をしたり、ただ沈黙したり、頭の片隅に浮かんだことを手帳に書いて整理したりしました。ただ、そうしている間も、スマートフォンの電源をつけようか、あるいはテレビのあるところにも行こうかという思いが頭によぎっていました。

ここで失われ（かけてい）たものが「孤独」です。退屈に耐えきれず、何か刺激やコミュニケーションを求めてしまう。自分自身と過ごすことができないということ。4「孤独」という言葉を通して、刺激を求めたり他者への反応を優先したりすることなく、自分一人で時間を過ごすことの重要性が語られているわけですね。

ただし、「孤独」といっても、これは「自分自身と過ごすこと」を

フラットに指す言葉なので、否定的な含みがないことに留意する必要があります。そうはいっても、悪い印象を持ってしまう人も多いでしょう。その疑問を払拭^{はらいつく}するためにも、どうして〈孤独〉が必要なのかという問いに、ハンナ・アーレントという哲学者の想像力を借りて迫ってみたいと思います。

アーレントは、「一人であること」を三つの様式に分けています。それが、〈孤立 (isolation)〉、〈孤独 (solitude)〉、〈寂しき (loneliness)〉です。この補助線を引けば、多少見通しがよくなり、〈孤独〉と〈孤立〉の関係も見えてきます。順に見ていきましょう。

アーレントは、他の人とのつながりが断たれた状態を〈孤立〉と呼びました。言い換えると、〈孤立〉は、何らかのことを成し遂げるために必要な、誰にも邪魔されずにいる状態を指しています。創造的・生産的なことでなくても、何かに集中して取り組むためには誰かが介在してはなりません。例えば「何かを学んだり、一冊の書物を読んだりする」ときなどに、「他の人の存在から守られていることが必要になる」ように。

要するに、何かに集中して取り組むために、一定程度以上求められるのが、この物理的な隔絶状態です。この意味で、〈孤立〉は、何かに集中的に注意を向けるための条件になっていることがわかります。

それに対して〈孤独〉は「沈黙の内に自らとともにある」という存在のあり方^{ありかた}だと説明されます。ちよつとおしゃれな言い方でニュアンスを酌^くみにくいと思いますが、〈孤独〉にあるときの私たちは、心静かに自分自身と対話するように「思考」しているということです。〈孤独〉とは、私が自分自身と過^{あやま}りしながら、「自分に起こるすべてのこ

とについて、自らと対話する」という「思考」を実現するものなのです。葬式の最中にデジタルデバイスを触りたがる老女は、悲しみを受け止める場を退屈に感じ、「沈黙の内に自らとともにある」ことができていなかったのです。

しかし、人から話しかけられたり、余計な刺激が入ったりすると、自己との対話（＝思考）は中断されてしまいます。この意味で〈孤立〉は、〈孤独〉とそれに伴う自己対話のための必要条件にほかなりません。⁵ 〈孤立〉抜きに〈孤独〉は得られないということです。

より興味深いのは、「一人であること」の三様式の残りの一つである〈寂しき〉です。アーレントは、〈孤独〉と〈寂しき〉を区別するとき、〈孤独〉が〈孤立〉（＝一人であること）を必要とするのに対して、〈寂しき〉は、「他の人々と一緒にいるときに最もはつきりあらわれてくる」と述べています。

〈寂しき〉は、いろいろな人に囲まれているはずなのに、自分はたった一人だと感じていて、そんな自分を抱えきれずに他者を依存的に求めてしまう状態です。どうにも不安で、仕事が虚しくて、友人や家族とうまくいかないのが苦しくて、誰にも理解されない感覚があつて、退屈を抱えきれなくて他者や刺激を求めてしまう。これに心当たりがない人は恐らくいませんよね。

実際、〈寂しき〉は旧来的な共同体が崩壊した都市社会に生きる現代人に、宿業^{しゆくごう}のようにのしかかるものだとアーレントは考えていました。私たちはみな、どこにいてもアットホームな気持ちになれない余所者^{よそももの}（故郷喪失者）のような心理になる素質を持っており、その気持

ちを忘れるために、何かや誰かと一緒にいたいと望む寂しがり屋なのです。

スマホという新しいメディアは、〈寂しさ〉からくる「つながりたい」「退屈を埋めたい」などというニーズにうまく応答してくれます。スマホは、いつでもどこでも使えるだけでなく、スマホを含む様々な情報技術が、私たちのタスクを複数化し、並行処理を可能にしています。コミュニケーションも娯楽もその他の刺激も流し込み、自己対話を止めて感覚刺激の渦に巻き込んでくれるマルチタスキングは、つながりへの欲望も、退屈や不安も覆い隠してくれます。

しかし、〈寂しさ〉からくるマルチタスキングは、いろいろな刺激の断片を**b**矢継ぎ早に与えるものなので、一つ一つのタスクへの没頭がありません。そうすると、ふとした瞬間に立ち止まったとき、「あれは何だったんだ」と虚しくなったり、つながりの希薄さ（つながっていても一人ぼっち）を実感したりすることになります。

常時接続が可能になったスマホ時代において、〈孤立〉は腐食し、それゆえに〈孤独〉も奪われる一方で、〈寂しさ〉が加速してしまいうもかかわらず、私たちはそうした存在の危うさに気づいていないように思えます。これまで論じてきた問題点に、スマホというメディアの特性を重ねると、〈寂しさ〉という問題が前景化してくるといふことです。

たにがよしひろ

（谷川嘉浩『スマホ時代の哲学——失われた孤独をめぐる冒険』

ディスカヴァー・トゥエンティワンより）

※1 タークル：一九四八。アメリカの心理学者。

※2 マルチタスキング：複数のことを同時に進行させること。タスクはやるべきこと、という意味。

※3 SNS：ソーシャルネットワークワーキングサービス (Social Networking Service) の略。

問一 ——線 a 「気もそぞろで」・ b 「矢継ぎ早に」とありますが、

本文における意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選
び、記号で答えなさい。

a 気もそぞろで

ア 心が落ち着かずに

イ 一つの考えに捉われて

ウ 油断することなく

エ 真剣に取り組めずに

b 矢継ぎ早に

ア 一挙に

イ 圧倒的に

ウ 慢性的に

エ 続けざまに

問二 —— 線1 「スマホを()でしょうか」とありますが、これについて筆者の考えとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア スマホを利用した表面的なコミュニケーションによって多くの交友関係を築けるようになった結果、様々な人に囲まれているにもかかわらず自分は誰にも理解されていないという漠然とした〈寂しさ〉を抱え込むようになった。

イ 都市社会に生きる私たちにも常に他者と一緒にいたいという根源的な〈寂しさ〉があり、スマホでその欲望を満たそうとした結果、身近な家族や友人ではなく画面の向こうにいる人物のことばかりを思いやるようになった。

ウ スマホを介して提供される多種多様なコンテンツによって一つのこと集中して取り組む能力が衰え、退屈に耐え切れず外発的な刺激ばかりを求めるようになった結果、ますます〈寂しさ〉を実感するようになった。

エ 一人でいる時のみならず誰かという時にもスマホのことが気になり、SNSに多くの時間を費やすようになった結果、周囲に人がいないと安心できないという〈寂しさ〉を常に感じるようになった。

問三 —— 線2 「人の注目()価値を持つ」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 雑多な情報が提供されるインターネットにおいては、情報の価値の判断は利用者に委ねられている、ということ。

イ 購入者数などの数値が最も重要視され、それらを獲得することがビジネスの目的となっている、ということ。

ウ 人々の情報への注目度が数値化されるようになったことで、情報の真偽は重要視されなくなった、ということ。

エ 特定の人々が発信する情報に価値が見出されるため、一部の利用者のみがその恩恵を享受している、ということ。

問四 —— 線3「〈孤立〉がくきます」とありますが、それはな

ぜですか。その理由の説明として最も適当なものを次の中から選
び、記号で答えなさい。

ア スマホを使っていない対面での会話の途中でさえスマホの
ことを考えてるようになった私たちは、もはや一人の時間を
充実させるしかないから。

イ スマホが注意を分散させることで目の前の相手の感情や心
理状態も考えなくなることが常態化している私たちには、他
者への関心以外の一つのこと集中する時間が必要だから。

ウ スマホを介した反射的なコミュニケーションを行うことで、
相手に共感したり並行処理したりする能力が衰え、その結果
スマホを手放すことになりかねないから。

エ スマホを触りながら話すことは、目の前の相手の人格や心
理状態を想像しない行為であり、そのような態度を改めるた
めにも対面での会話を充実させる必要があるから。

問五 —— 線4「自分自身とくできない」とありますが、これは

どういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中か
ら選び、記号で答えなさい。

ア 退屈を埋めるのに追われるばかりで、自分一人で思考する
時間が取れない、ということ。

イ 常に外部の刺激を求めてしまう自分を受け入れられない、
ということ。

ウ 他者との会話に熱中することで、自分自身と向き合う機会
を放棄しようとする、ということ。

エ 孤独に関する世間一般の否定的な考えを内面化してしまう、
ということ。

問六 —— 線5「〈孤立〉抜きに〈孤独〉は得られない」とありますが、

これはどういうことですか。三十文字以内で説明しなさい。

問七 この文章の論の展開に関する説明として最も適当なものを次の

中から選び、記号で答えなさい。

ア まず、スマホが私たちの感性に悪影響を与えている可能性を示唆している。次に、私たちの感性がスマホに支配されてしまっていることを、追悼式の例を用いて明らかにしている。最後に、前半部で読者に提示した問いに立ち戻り、その疑問についての解決策を示している。

イ まず、常時接続の世界で失われたものの独自の見解を述べている。次に、自説の根拠を提出するとともに、哲学者の思想とその限界について批判的に論じている。最後に、ここまでのスマホに関する議論の総括として〈寂しさ〉の前景化という結論を導き出している。

ウ まず、スマホが私たちの生活をどのように変えたのかと問題提起をし、常時接続の世界で失われた二つのものについて論じている。次に、問題点を掘り下げするために哲学者の知見を援用している。最後に、スマホの利用によって〈寂しさ〉の加速に無防備であることに警鐘を鳴らしている。

エ まず、スマホについて述べる上で読者にとって身近な例を示し、論点を明確にしている。次に、哲学者の学説を踏襲していることを示すことで、自説の学術的な価値を担保している。最後に、これまでの問題点を撤回して故郷を喪失した現代人の特性に注目する必要性を説いている。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ヒロ：二十四歳。本名は「ヒロコ」。ハワイ旅行に来た日本人の父とハワイアンの母との間に生まれた。六歳の時に、母に連れてこられた日本で置き去りにされ、福祉施設で育った。その際、手違いで「ヒロ」という名前になる。現在は「晴太」と「蒼」の三人で暮らしながら、惣菜とコーヒーの店「△(さんかく)」を営んでいる。

晴太：二十五歳。会社社長である「黒宮慎司」の養子であったが、黒宮の実子「蒼」が生まれ、家を追い出された。かつて「ヒロ」と同じ福祉施設にいたことがある。

蒼：中学三年生。「黒宮」と愛人との間に生まれた子。「黒宮」の妻が男児を生んだため、家を追い出された。

ある時、「ヒロ」はハワイに住む母の家を訪ねた。本文は、家で「ヒロ」が母と祖母に食事を作った場面である。

「できたよ」

母がはっと振り返った。笑顔を作って、「いいにおいがしてきたからお腹が減ったわ」と立ち上がった。

祖母が私の作った料理を口に運ぶのを、息を詰めて見守った。「△」はオフィス街と下町らしさの残る住宅街のちょうど中間にある。買った

ていくのは若い社会人が忙しい主婦なので、祖母のような歳の人にも食べやすいものを意識して作ったのは初めてだった。

母の毎日を想像した。歯の存在を見失うような柔らかな食べ物を毎日作って食べて、ああそれはもしかすると子育て中の食事作りに似ているのかもしれないと唐突に思い当たる。私を育てた短い日々のことを、母は料理をしながら思い出すことはあったのだろうか。

「おいしいよ、ヒロコ」

母が次々と料理にフォークを伸ばしては大きさに褒めたてる。祖母の耳に口を寄せて、「ヒロコが作ってくれたのよ、全部」と言い聞かせている。祖母はほうれん草を口に運んでもごもごも咀嚼して、白いごはんに手を伸ばす。

「おいしいでしょう」

母が尋ねる。祖母は顔を上げ、私に微笑む。

「おいしいよ。ヒロコ、ありがとう」

よかった。そう言うてにっこり笑う仕草がすぐに出てこなかった。

「おいしい？」と訊くのは苦手だった。はいといいえで答えられる質問なのに、「おいしい」の答えを強要しているみたいに感じられるからだ。私が訊かない代わりに、晴太は戸惑いなくお客さんに尋ねた。「おいしかった？」と、「おいしかった」の答えを信じて疑わないかのように。

惣菜を選ぶお客さんの傍らで朝ごはんを食べる蒼は、私がいくら叱ってもお客さんの選択に口を挟みたがった。「それおれも食った。うめーよ」とか、「野菜ばっか買っんだな。肉とか魚とかいらねえの？」とか、信じられない無礼さで突然声をかけるのに、一瞬驚いた顔をして誰も誰一人として気分を害したふうなお客さんはいなかった。

母が煮物を不思議そうに眺めたあと口に含んで、言う。

「店は繁盛してるの」

「まあまあ。食べていける程度には」

「どれくらい経つの、始めてから」

「まだ一年。借金はないから、なんとかなってる」

※2 黒宮慎司からの資金、名目上蒼の養育費としてまとまって渡されたお金で私たちは店の機材や設備を整えた。そのことを母に説明するのは、ひどく億劫※3に感じられた。

「マヨネーズ、作ったの？」

「うん、買うよりおいしいから」

母と祖母が同時にポテトサラダを口に含む。ぽつりとした頬がまったく同じ動きで上下する。

晴太と蒼みただ。

不意にそう思ったら頬を水が滑って、母が驚いた顔でこちらを見た。

「ヒロコ？」

汗かと思っただそれは涙だった。それも、溢れた容量を垂れ流すみたいなとめどなさで、次々と頬を伝った。

「どうしたの、ヒロコ」

母が手を伸ばす。私の頬に触れ、まるで手のひらで涙を吸い取ろうとするかのように顔を丸く包む。私は箸を置き、その手をそっと押しやった。母の手が宙で止まる。

「期待しないで」

鳴咽おえうに飲まれることなく、はつきりと音にした。母はお気2に入りの食器にひび割れを見つけたように一瞬間を歪めて、すぐに口元を引き

締めた。想像通りの甘えた期待があったことが、その口元に表れた気がした。

「私が娘みたいで嬉しい？ ずっと三人で暮らしてきたみたいだった？ こうやって、これからも私がごはんを作って、ここで暮らせばいいって、そう思った？」

食卓に大きな粒が落ちた。濡れて、揺れて、広がる。

「なかったことにしないで。私、ちゃんと悲しかった」

ゆるすとか、ゆるさないとか、そういうことはもうどうでもいい。ただ、なかったことにしないでほしい。

あのとき母には私が見えていなかった。透き通った私の向こう側、いると思ひ込んでいた父の姿だけを見ていた。だから私を日本に置いてくれたのだ。私の姿と母が信じた父の姿が重なって混ざり合い、私を感じた悲しみはこの人には届かなかった。もちろん、父にも。

あのとき確かに損なわれた私を、私はずっと大事にできなかった。母には透き通って見えた私の身体は私にも透き通っているように感じられ、声も言葉もぜんぶ通り抜けていった。おかげで知らない言葉がぶつけられる痛みも薄い代わり、私の中に大切な言葉が残ることもほとんどなかった。

聞き取ることのできない日本語は風のようにとらえどころがなく、そんな私から発せられる言葉も確かな形にはならなかった。曖昧な笑みで理解も不理解もやりすごしてしまう日本の教師やクラスメイトたちと意思を合わせ合うことはとんでもない徒労に感じられ、やがて諦めた。

それでもかろうじて引っかかったのが晴太だ。あの暑い秋晴れの運

動場で、私に笑いかけた晴太だけが私を通り抜けなかった。晴太が、蒼が、私の代わりに私を大事にしてくれたから、こうしてハワイまで来ることができた。

それをこんなふう4に曖昧な笑顔で上塗りして、この生活が真実のよ4うな顔をされることが、どうしても耐えられなかった。

「ヒロコ」

母の視線が私の顔とテーブルに落ちた涙、そしていくつもの料理の上をさまよう。

「ちがう」短く言い切った。

「私はもうヒロコじゃない」

私は橘ヒロコだ。

橘は父の姓で、ヒロコは私の名。胸を張ってヒロコではないと言える。私はこの名前を手にしたときから確かに日本人となったのだ。もしかしたら初めは不確かだったのかもしれない。晴太と蒼と過ごした日々によって、遡5って私という骨格を手に入れた。

祖母がおもむろに顔を上げ、私を捉える。母は唇をわななかせていた。

「ヒロコ、私はあのとき、あなたは日本にいた方が」

「リサ」

祖母が母の名を呼んだ。祖母はフォークを握りしめたまま、そっと目を閉じた。

「言い訳はしない。これ以上見苦しい母親になったらいけない」

祖母はきっぱりとそう言うと、思い出したように口を動かして咀嚼を再開した。私たちは息を詰めてその動きを見つめる。

母がぼつりと言った。

「ヒロコが帰ってきたのを喜んでいいけない？」
6 「一度手放したのはあんただ」

祖母がびしやりと答えた。

「あんたが喜ぶことがヒロコの重荷なら、喜んだらいけない。期待するなど言われたら、期待しちゃいけない。まだ母親でありたいと思うなら、それくらいしてやりな」

母が呻いた。泣くかと思つたが母は泣かなかつた。涙が通つた頬がひりひりと痛む。

「おかあさん」

母が私を振り返る。祖母はポテトサラダの大きなひとかたまりをフォークで持ち上げた。

「明日日本に帰つたら、私はもうここには来ないかもしれない。でも、おかあさんも、おばあちゃんも、元気でいてほしい。二人も私のこと、そうやって思つてて」

そうだ、それを言うために、私はハワイまで来たのだ。

「それ以上、私にはなにもできないよ」

うつむいた母がどんな顔をしているのかは、わからなかつた。また一筋、頬に理由のわからない涙が流れたがそれが最後で、祖母がカチャカチャと食器を鳴らす音だけが耳に届いた。

余つたポテトサラダにラップを掛け、冷蔵庫の黄色い光の中に閉じ込められるのを切ない気持ちで見送る。冷蔵庫の黄色い光は苦手だ。だから、店のショーケースの光は眩しいくらい白い照明にした。

「洗おうか」

声のした方を振り返ると、祖母が腕まくりをしながらのんびりとダ

イニングテーブルを回ってくる。

「いいよ、私やるから」

「リサは、自分の子と同じくらい自分が好きな子だから。ヒロコの方が先に大人になったんだろうね」

シンクの前に立つた祖母が蛇口をひねると勢いよく水が飛び出し、その強い水流のまま彼女は皿を洗い始める。私にはかなり低いそのキッチンには、祖母が立つととたんに収まりが良く見える。

「……おかあさんは？」

「ふて寝だよ。昔からそうなんだ、あの子は。怒つたり泣いたり、気に食わないことがあるとだいたい部屋に閉じこもる。そのくせお腹が空いたら出てくるんだから、扱いやすいもんだよ」

私が息を漏らして笑うと、祖母は顔を上げて目を細めた。

「随分背が伸びたね」

眩しいものを見つけたように、祖母は私の顔を見上げた。

「私も、リサも小さいのにさ。あの日本人はひよろひよろと高かつたからね」

「……知ってるの？」

「知ってるさ」

祖母はそれ以上言わなかつた。ざばざばざばと、大量の水が洗剤の泡を押し流していく。祖母が洗った皿をかごに置いたので、布巾を手に取り濡れた食器を拭いていく。

三人分の大皿を拭き終わったところで祖母が口を開いた。

「訊きたいことがあるならいくらでも訊いたらいい。訊きたくなければ私からは何も言わない。無理してここに来なくていい。でも、

来たくなつたならいつでも来たらしい」

不意にこちらを向いた小さな顔が、にゅっと唇を反り返らせて齒を見せた。祖母は笑っていた。

「ま、そのときには私は死んでるかもしれないけどね、あの子は変わらずここにいるだろうからさ」

「おばあちゃん」

呼んだものの、何を言っているかわからなかった。悲しい話をしてるのではないとわかっていった。

「おばあちゃん、私、怒ってたわけじゃない」

「わかってるよ」

かわいいヒロコ。私の、かわいい。

うたうようにそう言つて、祖母は服の裾すそで濡れた手を拭つた。ぽんと樂器を鳴らすように私の腰を軽くたたいて、「ああおいしかった。あんた先にシャワーを使いなさい」

そう言つてまたダイニングテーブルを回つて、祖母の部屋がある奥へと歩いていく。

濡れたシンクを見つめたまま、しばらく立ち尽くしていた。⁸ひたひたと足元に温かい水が溜たまるような奇妙な感觸をしばらく味わつてから、そつとエプロンの紐ひもをほどいた。

(菰野江名『つきはぐ、さんかく』ポプラ社より)

※1 咀嚼：食べ物をお口の中でかみくだき味わうこと。

※2 黒宮慎司からの資金：蒼が黒宮家を出されてから定期的に振り込まれている金。

※3 億劫：面倒で気が進まないこと。

問一 —— 線1「よかった。そう言つて〜出てこなかった」とあ

りますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 母の「おいしいでしょう」という問いかけに祖母が「おいしい」と答えたことは、母自身がおいしいと思わなかったことをごまかすためだったと気づき不信感を抱いたから。

イ 「おいしい？」と他人に訊くことは、「おいしい」という返答を強要しているように思えて、素直に喜ぶことができなかったから。

ウ 祖母が「おいしい」と答えることを確信して、「おいしいでしょう」と母が訊いてみせることが、自分に媚こびているように不愉快だったから。

エ 「おいしい？」と他人に訊いても「おいしい」という答えしか返つてこないと知っていたため、祖母に「おいしいでしょう」と母が尋ねたのを無意味だと思ったから。

問二 —— 線2 「お気に入り顔を歪めて」とありますが、この時の「母」の気持ちについて述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ヒロの力になろうとしたのに拒否された憤りと、長い時間が二人の心を隔てた事実の大きさを感じている。

イ ヒロとの関係はもはやどうにもならないのだという諦めと、悪いことをしたという自責の念を感じている。

ウ ヒロから予想外に拒絶された驚きと、ヒロに自分の気持ちを言い当てられたような居心地の悪さを感じている。

エ 自分の優しさを受け入れようとしないうちにヒロに対する戸惑いと、犯してしまった罪の重さを感じている。

問三 —— 線3 「晴太だけが私を通り抜けなかった」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 母がヒロの存在を軽んじて、ヒロの抱えている悲しみを理解しようとはしなかったことを他の誰も気づかなかったので

ヒロはいつも孤独だったが、晴太とだけは同じ悲しみを共有できた、ということ。

イ 母にとってはヒロよりも父が大切だったと知って以来、ヒロは自分の存在を否定するようになり、周囲の人々もそれに同調してヒロを無視していたが、似たような境遇だった晴太だけは心を通わせてくれた、ということ。

ウ 母はヒロのことを理解することも大切にするかもしれない。かつた上に、父は日本の言葉を教えてくれなかったため、誰とも意思の疎通を図れなかったが、晴太だけは言葉や人との関係の作り方を教えてくれた、ということ。

エ 周囲の人々から投げかけられる言葉はヒロの心に何も響かず、またヒロ自身も次第に他者と交流しなくなってしまったが、晴太だけはヒロという存在を認めて心を通わせてくれた、ということ。

問四 —— 線4 「こんなふうに」されることとありますが、このように受けとめている「私」が母の中に感じとっていたものは何ですか。それがわかる表現を文中から探し、五字で抜き出ささい。

問五 —— 線5 「私という骨格を手に入れた」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 母に対して逃げずに向き合ったことで、晴太と蒼とも胸を張って生きていけるようになった、ということ。

イ 長年抱えていた両親への憎しみを断つことによって、晴太と蒼という家族を得た、ということ。

ウ ヒロという名前と、ヒロを大切にしてくれる晴太と蒼という存在を得たことによって確かな自己を獲得した、ということ。

エ 晴太と蒼が、ヒロが負った心の傷を忘れさせようとしてくれたことで、母を恨む気持ちがなくなった、ということ。

問六 —— 線6 「一度手放したのはあんただ」とありますが、この

時の「祖母」の様子の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ヒロを置き去りにしたことが母親としてすでにあるまじき行いであり、それをわかっている我が子に、これ以上言い訳をしないよう諫めている。

イ かつてヒロを置き去りにしたことを正当化しようとしている上、そのことを許されたと誤解している我が子に、親のあべき道を論じている。

ウ ヒロを置き去りにしたのは自分のせいではなく、ヒロの父親の意思によるのだと弁明しようとしている我が子に、嘘をつかないように牽制している。

エ 置き去りにしたことを、まるでなかったかのようにヒロが帰ってきたと手放して喜んでいいる我が子に、かつて自分が出たことの償いをするよう促している。

問七 —— 線7 「涙が通った頬がひりひりと痛む」とありますが、

この時の「ヒロ」の気持ちについて述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ヒロを捨てたことを母が後悔していなかったことがわかり、あらためて失望している。

イ ヒロが抱えてきた悲しみを母がなお受けとめてくれないことに気づき、あらためてその思いをつのらせている。

ウ ヒロがハワイへ来たのは自分を恋しく思っていたからだとも母が勘違いしていたと気づき、あらためて悲しんでいる。

エ かつてヒロを置き去りにしたことを母は何とも思っていないことがわかり、あらためてくやししく思っている。

問八 —— 線8 「ひたひたと」奇妙な感触」とありますが、この

表現から読み取れる「ヒロ」の様子について述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 祖母が、思いがけずヒロの悲しみを理解しようとしないうを諫め、その上温かい言葉をかけてくれた。その一方で祖母の言葉の真意をわかりかねて、戸惑っている。

イ 自分の出生にまつわる秘密を母ではなく祖母から聞かされたことに違和感を覚えた。その一方でこれまであまり思い出すことのなかった祖母の存在がヒロの中で大きくなり、祖母に甘えたい気持ちが生まれたことに驚いている。

ウ 母に悲しみを分かってもらいたかったが、やはり理解し合うことはできなかったという満たされない思いが残った。その一方で切り離すことのできない血のつながりのようなものを感じる自分に、理解が追い付かないでいる。

エ 予想していた通り、母からは自己弁護の言葉しか聞くことができずに落胆した。その一方で母が自分なりにヒロへの償いをしようとしていることを祖母が教えてくれ、初めて母から愛情を受けていることを実感している。

四

問題文〈甲〉・〈乙〉を読んで、後の問いに答えなさい。
 なお、問題文〈乙〉については設問の都合上、送り仮名
 や返り点を省略した部分があります。

見^ル日、不^レ見^ト長^ニ安^二。

〔世説新語〕 夙慧第十二より

〈甲〉

今は昔、唐^{タウ}に、孔子、道を行きたまふに、八つばかりなる童あひぬ。孔子に問ひ申すやう、「日の入る所と洛陽と、いづれか遠き」と。孔子いらへたまふやう、「日の入る所はⅠ」。洛陽はⅡ」。童の申すやう、「日の出で入る所は見ゆ。洛陽はまだ見ず。されば日の出づる所はⅢ」。洛陽はⅣ」と思ふ」と申しければ、孔子、かしこき童なりと感じたまひける。

〔宇治拾遺物語〕 卷第十二より

〈乙〉

晋^{シン}明^{メイ}帝^{テイ}数^{スウ}歳^{サイ}、坐^ゼ元^{ゲン}帝^{テイ}膝^{キツ}上^{ジョウ}、有^{アリ}人^{ニン}從^{ジュ}長^{チヤウ}安^{アン}来^{ライ}。元^{ゲン}帝^{テイ}問^{モン}洛^{ラク}下^カ消^{シヤウ}息^{シツ}、澗^{カン}然^{ゼン}流^{リウ}涕^{テイ}。

明^{メイ}帝^{テイ}問^{モン}「何^{ナニ}以^{ヨリ}致^シ泣^ク。」具^ク以^{ヨリ}東^{トウ}渡^ト意^イ告^コ之^ニ。

因^{リテ}問^フ明^{メイ}帝^{テイ}「汝^{ナンチガ}意^イ謂^フ、長^{チヤウ}安^{アン}何^{ナニ}如^ニ日^{ニチ}遠^{ケン}。」

答^{コタヘ}曰^ク「日^{ニチ}遠^{ケン}不^レ聞^カ下^カ人^{ニン}從^{ジュ}日^{ニチ}辺^{ヘン}来^{ライ}上^{ジョウ}居^ク然^{ゼン}可^カレ」

知^ル元^{ゲン}帝^{テイ}異^イ之^ニ。明^{メイ}日^{ニチ}集^{メテ}群^{クン}臣^{シン}宴^{エン}会^{カイ}、告^コ以^{ヨリ}二

此^{コノ}意^イ更^ニ重^{ネテ}問^フ之^ニ。乃^チ答^{コタヘ}曰^ク「日^{ニチ}近^{キン}。」元^{ゲン}帝^{テイ}失^{シテ}色^{シキ}

曰^ク「爾^{ナンチ}何^{ナニ}故^コ異^{ナル}昨^ノ日^{ニチ}之^ノ言^{コト}邪^ヤ。」答^{コタヘ}曰^ク「拳^{ケン}目^メ

※1 洛陽：地名。後出の長安とともに、古代中国において都が置

かれた地であるが、ここでは遠く離れた町、というほどの意味である。

※2 晋明帝：晋は、古代中国の王朝名。明帝は晋の二世皇帝。

※3 元帝：明帝の父。

問一 —— 線1「いらへたまふ」とありますが、その解釈として最

も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 感心なさる
- イ お答えになる
- ウ 気を悪くなさる
- エ 不思議なお思ひになる

問二 —— 線2「具以東渡意告之」は、「具に東渡の意を以て之に告ぐ」と訓読します。これを参考にして、解答欄に返り点を付けなさい。

【国語】

解答用紙 (高校第二回)

受験番号

氏名

得点

一

あ

たいだ

い

けんきよ

う

ろうひ

え

さいそく

お

ち

二

問一

a

b

問二

問三

問四

問五

問六

問七

三

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

四

問一

問二

具以東渡意告之

問三

(1)

(2)

日近 日遠

から。 から。

問四

問五

問六